

自己紹介というか教会の思い出

主任司祭 高木 健次



この度高円寺教会に参りました東京教区司祭の高木健次です。1971年1月12日生まれ51歳です。出身は千葉県船橋市で、母がカトリック信者でしたので、子供のころから船橋教会(現在は移転して習志野教会になっていきます)に通っていました。小学生のころは教会がいやだという感覚はなかったように思います。兄の友達の少し上のお兄さんお姉さんと接することのできる機会でしたし。その中の一人が東京教区の福島神父様です。それにしても小学校にあがるか上がらないかの子供

が「いと高き」とか「給え」とか「聖寵」とかいう言葉を、言葉遊び感覚ではあったとしても平気で言っていた教会はすごい世界でしたね。「いと」がとてもという意味などは学校では中学に入ってから習うというのに。ミサも途中退屈していたでしょうが、出るのが当たり前で、記憶を美化しているわけではないのですが、どちらかといえば好きでした。ミサの中で子供の役割があつたことも良かったのでしよう。小さいころは奉納でチボリウムを神父様に渡す役、少しおおきくなつてから侍者もやっていました。当時私の教会では侍者は小学生の男子のみで、大人は指導しても祭壇に立つことはありませんでした。また小学生の女子は献金少女でした。高円寺教会ではこの言葉は使われていたのでしょうか？赤いケープを羽織って、棒の先に袋のついた道具で会衆席を回って献金を集めるお姉さんたちもかつこよく見えて、自分もやってみたかったのですが、その機会はありませんでした。ところで、献金少女という言葉が教会外では通じないし、少し滑稽にさえ聞こえるとい

うことに気づいたのはかなり後になって、多分高校生くらいの頃です。学校で違う教会の信者の友達と話していて、「献金少女って変な言葉だよ」と言われて、はつとしたのを覚えています。当時はリクルート事件だからで献金疑惑などの言葉がさかんにテレビで使われていましたから。現在、入門講座や信者でない人の参加する学生ミサなどで、相手に伝わらない言葉遣いをしていないか注意していますが、教会の言い方と教会外の社会のずれを意識した最初の経験、だつたかもしれません。言葉遣いのずれということでは、20代の中頃に人生に迷ってふらふらしていた時、表面的にはとりつくりつて上智大学の神学部に行ったことがありました。その時バイト仲間に、神学部でどんな勉強をするのか聞かれて、「例えば教会論とか」と言ったら、「教会論？建て方とか？」と返ってきてはつとしたこともありました。私は教会を当然信者集まりの意味で使ったのですが、彼は教会堂をイメージしていました。

つづく(いつか)